

## 形なき世界遺産

吉水千鶴子

人文社会科学研究科講師

近年「世界遺産」という概念が広く浸透してきた。それは人類が作り上げてきた歴史的建造物であったり、巧みな生態系をもつ自然環境であったりする。世界が発達した交通網で結ばれているおかげで、私たちは多くの世界遺産を実際に訪れることができるが、世界遺産を私たちの日常の話題にさせた最も大きな要因は、映像文化の発展であろう。すぐれた映像技術、インターネット技術のおかげで、私たちは自宅にいながら、それらの姿を知ることができる。多くの人たちがその価値を理解することで、それらの保護・保全が促進される。本学でも、芸術研究科修士課程に世界遺産の専攻分野が立ち上げられた。

世界遺産を人類が共有することになった過程は、グローバリゼーションのひとつであるかもしれないが、遺産をそのままの姿で継承していくことは、地球上の文化と自然の多様性を守っていくことにはかならな

い。文化について考えれば、それは地域性、民族性、時代性のみならず、作り手たちの技術力、創造性、理想、哲学や信仰等のあらゆる個性を反映している。また、広島原爆ドームのように、人類にとって忘れてはならない歴史的体験を刻んだものもある。しかしながら、これらの現在の世界遺産は、すべて「形あるもの」である。文化遺産の登録基準には、「記念碑」「建築物群」「遺跡」のいずれかであるものという指定がある。これらはすべてヴィジュアル化されうる。映像になるのである。

だが、人類の文化遺産は形あるものばかりではあるまい。「人間国宝」「無形文化財」という言葉が示すように、担い手となる人間がいなくては保持できない伝統文化がある。そして、やはり担い手となる人間がいなくては滅んでしまうものに言語がある。今日のグローバリゼーションの潮流の中で、多くの少数民族言語が消えようとしている。

また、英語さえできればよいという実用的な考え方が大勢を占め、大学においても第2外国語の重要性は薄れつつある。私自身は多くの言語を学んだが、学生たちには、まず英語をきちんと身につけるように、と言わざるを得ない。しかし、言語こそはすべての文化の基礎であり、民族や共同体のアイデンティティなのである。植民地支配において、他民族支配の常套手段はその言語を奪うことであった。それは彼らの社会と文化の自立性を奪い、支配者の文化への従属を強いるものである。

言語の研究は、人文分野でなされるものであるが、文学、哲学、歴史のみならず、人間の社会を支えている政治、経済、あらゆる自然科学も言語という媒介無しには成立しない。それ故に、現代社会は世界共通の言語を必要とする。だが、そこへ到達するまでに、どれだけ多種多様の言語を人間が生み出してきたか。その「形なき世界遺産」を私たちは守っていく責任があろう。

言語は、もちろん書かれた文字で見ることができ。まったく形がないわけではない。しかし、意味を知らずして、その言語を理解することはできない。古代エジプトのヒエログリフ（象形文字）は、今日の絵文字のようであるが、意味もっている。また、古代においては、文字を使わずに何らかのテキストを伝承していく口承という

方法がしばしば用いられた。担い手なくしては、不可能な伝承である。このような方法で、少なくともその初期においては伝えられ、紀元前1200年の昔から今日まで、ほぼ当時の姿をとどめて保持されてきたものに、インド最古の文献『リグ・ヴェーダ』がある。これは神々への讃歌集であり、祭官階級（バラモン）が編纂した最古のサンスクリット語文献であるヴェーダ文献を代表する。サンスクリット語は、インド・ヨーロッパ語族に属し、ギリシャ語、ラテン語、ゲルマン諸語、ケルト語、スラヴ諸語、トカラ語などと共通の祖語をもち、狭くはインド・イラン語派のインドアーリヤ語派に分類される。『リグ・ヴェーダ』の時代、この言語の担い手たちは西からやってきてインダス川上流地域に定住していたと考えられている。

「サンスクリット」とは「洗練された、完成された」言語を意味し、インドでは祭官や王族などの教養階級のみが用いる言語であった。これに対して「自然な、通常の」、つまり女性や庶民が話す言語は「プラークリット」と呼ばれる。これは地域性が強い。紀元前400年ごろ活動したブッダは、ガンジス川中流地域のプラークリットで教えを説いたと伝えられる。初期の仏教経典に用いられたパーリ語もプラークリットである。これはサンスクリット語ときわめて近い。

パーリ語で編纂された経典は、南伝大蔵経として東南アジアに伝えられ、今日まで伝承されている。一方、北インドでは、主にサンスクリット語で経典が編纂され、中国を経て我が国に伝えられた大乘経典のほとんどは、サンスクリット語からの翻訳である。ヒンドゥー教の多くの聖典、有名な『バガヴァッド・ギーター』を含む叙事詩『マハーバーラタ』に代表されるインドの古典文学作品もサンスクリット語で書かれ、カーリダーサのような傑出した詩人をも生み出した。

現代インドでは、サンスクリット語は死語に等しい。それを教養語として話すパンディットと呼ばれる学者も年々少なくなっている。それでも前述の『リグ・ヴェーダ』は、3200年も前からほとんど変わらないアクセント、読み方で今も細々と学ばれている。驚くべきこの長い伝統を可能にしたのは、ヴェーダ文献のサンスクリット語というものが、宗教祭式に関わるものであり、正しく発語されることによるのみ、その宗教的効力を発揮することができるものであったため、伝承に厳格さを必要としたことによる。今日、仏教の中に伝わる陀羅尼、真言といわれる呪術的文句も、こうしたインド古来のヴェーダの伝統に由来する。言語に魔術的力を発揮させるための厳格さは、言語そのものにも向けられる。サンス

クリット語は、紀元前の時代から、まさに人工的といってよい文法的精緻さをもった「完成された」言語であった。それはブツダの活動期にも近い紀元前380年頃、「パーニニ文法」によって達成される。パーニニは、アケメネス朝ペルシャの役人であったと考えられている（当時イランと北インドはひとつの文化圏であった）人物で、『8章からなる書』を著した。これによってサンスクリット語の様々な語形の形成とその要素の意味が明確に規定された。ひとつひとつの規則はきわめて短い式で述べられ、インド人はそれを暗証して記憶し、伝承した。規則を立てるための規則（メタルール）、メタ言語が散りばめられたこの書は、『リグ・ヴェーダ』、『マハーバーラタ』などと並んで、間違いなくインドが生んだ偉大な知的遺産であろう。私たちインド学者は、この書物が自分の書棚に並んでいるのを、しばしば満足げに眺めている。しかしながら、この分野の専門家以外は容易に理解することはできない。私たちが実際に勉強するのは、後代の綱要書をさらに初心者向けに解説した英訳つき入門書である。

例えば6章1節77番の規則に言う。「acが続くと、ikはyanに置き換えられる。」acとは、すべての母音、すなわち a, i, u, r, ! とその長母音、e, o, ai, au を指す。これら任意の母音が ik, すなわち i, u, r, ! とその長母音の後ろに続く

と、これら母音はyaṅ、すなわちy, v, r, lという半母音にそれぞれ置き換えられる、という音韻規則である。ac, ik, yaṅ は、パーニニ文法中のメタ言語に含まれる。これを知らなくては、この書を読むことはできない。そして、パーニニ以後にサンスクリット語で書かれた書物は、このパーニニの規則を外れることはない。三蔵法師こと玄奘が629-645年のインド旅行中に留学したナーランダ大僧院は、当時最大の仏教大学であったが、そこでもこの文法が教えられていた。故に、私たちが仏教文献を読むときにも、パーニニの規則をまったく知らないわけにはいかないのである。私などは覚えられないので、自分の机の上に表を貼っている。

古典サンスクリット文学を代表する叙事詩『マハーバーラタ』も、ブッダやパーニニと同じ時代に編纂され始め、数世紀をかけて現在に伝わる7万5千詩節という膨大な原典ができあがったとされる。これはクルー族の大戦争を語るものであるが、さまざまな神話、物語、哲学、社会倫理、法律などを含むインドの百科事典である。日本語では、ちくま学芸文庫から8巻まで翻訳が出版されたが、訳者の早すぎる死によって未完となっている。インド人が人生において求める「法(ダルマ、社会的義務)、実利(アルタ)、愛(カーマ)、解脱(モークシャ)」に

関して、「ここにあるものは他にもある。ここにはないものは他にもない」と叙事詩自身が語っている。諸国を巻き込んだ従兄弟間の戦争は、勝利者にも敗北者にも虚無をもたらただけであった。すべてをつかさどる「運命、時間(カーラ)」がこの作品の本当の主人公であると訳者は述べている。この警告は、現代においても深い意味をもつことに、背筋が寒くなるような思いすらする。

サンスクリット語という精緻な言語、そして仏教、ヒンドゥー教などの宗教をとおして生み出された哲学的宗教的洞察、文学作品に表れた世界観はインド文化の輝かしい遺産である。今日、IT産業に躍進するインドの姿も、その重なりを伝統のどこかに見出せるものかもしれない。古い言語を学び、古典を学ぶということは、ただ単に伝統を学ぶことではない。死が生の中においてしか感じるができないのと同様、古典も今においてしか感じることはできない。私たちが、古典との出会いによって自分自身の先入観を毀すとき、新しさが生まれる。新しさとは私たちの感性の中にある。古典とは、私たちがまだ出会っていないものである限り、過去ではなく未来なのである。世界遺産とは、廃墟の遺跡をいうのではない。

(よしみず ちづこ／哲学・思想)